

世界の人びとのためのJICA基金・業務完了報告書

1. 業務の概要:	
(1) 事業名	ブラジル国 障害者のニーズに配慮したHIV / AIDS教育モデル事業
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人 DPI 日本会議
(3) 実施期間	平成 21 年 10 月 19 日 ~ 平成 22 年 5 月 31 日
(4) 実施国	ブラジル
(5) 活動地域	ペルナンブコ州レシフェ市(ブラジル東北部)
(6) 活動概要	<p>活動の背景:</p> <p>貧困地域に住む障害者は基礎教育や保健・性に関する教育の機会がほとんどないため、性的虐待やエイズ予防の知識を欠き、高いリスクにさらされている。とりわけ音声・文字による情報を得られないろう・難聴者や非識字層の障害者は、ブラジル国内で提供されている HIV/AIDS サービスから完全に除外されている。</p> <p>本法人は 2008 年 10 月より、JICA 草の根技術協力事業「ろう者組織の強化を通じた非識字層の障害者への HIV/AIDS 教育(プロジェクトたんぼぼ)」をペルナンブコ州で実施している。この事業では、ろう者自らが HIV/AIDS ワーカーとなるために研修を受け、ワーカーたちは必要な情報が教育を受けていないろう者にもわかるように、手話や図画・動画、劇などの手段を使った教材を開発した。これらの教材を利用して、今後ペルナンブコ州各地でワークショップを数多く実施していくことで、障害当事者が単なる受益者としてだけでなく、啓発・教育の担い手としても社会から認識されることが期待出来る。その期待を実現するため、より多くの障害種別を越えた当事者同士が協力して、教材開発に望めるよう本事業を実施するに至った。</p> <p>活動の目標:</p> <p>「非識字の障害者への HIV/AIDS 教育の実現」に資するモデルを構築し、当該モデルを現在草の根技術協力事業で実施しているろう組織以外の障害者団体に浸透させることを目指す。そのために、ろう者向けに開発された教材や研修手法を、他の障害者団体の協力を得ながら、他の障害別(知的、肢体、視覚など)のニーズに適合させ、センシティビティトレーニングを通して各障害者団体に周知することを目標とする。</p>

2. 業務実施結果:

(1) 実施した内容

【実施内容】ろう以外の障害者に必要な情報のあり方の調査

- 1.1) ろう以外の障害者組織(知的、身体、視覚など)からのヒアリングを行い、情報ニーズとコミュニケーション方法について調査した。
- 身体障害当事者(CP と車椅子使用者)からのヒアリングとセンシティブティ・トレーニング (2009年11月)
 - 視覚障害当事者からのヒアリング(盲者・弱視者)(2009年11月)
 - 盲者と盲ろう者のアクセスとセンシティブティ・トレーニング (2010年2月と3月)
 - 知的障害当事者(ダウン症)からのヒアリングとセンシティブティ・トレーニング (2010年3月)
 - 肢体障害当事者(CP)によるセミナー(4月14-15日)へ参加とその後2回(4月20、22日)センシティブティ・トレーニング

【実施内容】非識字層の障害者を対象とした HIV/AIDS 啓発教材・研修手法の開発

- 2.1) 実際にプロジェクトたんぽぽで開発した教材・研修手法を非識字の障害者が理解可能なものにするために、1の調査から出される【音声】【わかり易い表現】【やさしい言葉】などを取り入れて再構成する。その際、ろう以外の障害者団体に作成協力・監修をしてもらった。
- 盲者に必要な【副音声】を開発された DVD につけるため、通訳者が副音声のトレーニングを受けた。
 - 盲者のアクセスについて学び、基礎的な点字を習った。
 - 知的障害当事者が使用している【わかり易い表現】を習い、取り入れた。
 - 身体障害当事者からは非識字の障害者対象に【絵】を使った教材にすること、更に、車椅子使用者が地域の人と共にワークショップに参加できるように、会場のアクセスなどについて教示を受けた。

【実施内容】HIV/AIDS に関するセンシティブティ・トレーニングの開催

- 3.1) 2を基に障害者団体のリーダーやコミュニティプログラムを担当しているスタッフを対象にセンシティブティ・トレーニングを2日間x2回開催した。障害者の権利と差別、HIV/AIDS や性的虐待などを取りあげた。
- 地域のろう者と他の障害者とではコミュニケーションのとり方に差があるので、手話によるワークショップ(1月)と手話通訳付きのワークショップ(4月)と2回に分けてセンシティブティ・トレーニングを行った。
 - 2回共、HIV/AIDS に関する教材の披露・評価に留まらず、どんな障害を持っていても「人としてもつ権利は平等でなければならない」という視点からそれぞれの人権の理解と障害種別に直面している社会的バリアーについて情報共有した。

【実施内容】活動評価

4.1)実施内容 の参加者のフィードバックに基づいて、教材、進め方、研修手法など、今後のろう以外の非識字層の障害者を対象とする活動を検討する。

- 教材についてのフィードバックを参加者から集め、今後さらに改善・再製が必要な部分について検討した。
- 今後事業が行う遠隔地域でのワークショップにおいてどのように非識字層の障害者へアウトリーチしていく必要があるか検討した。

(2)実施成果:

障害種別に焦点をあて、そのなかでも特に「障害 + 非識字」ということを想定し、それぞれの特徴、アクセシビリティとセクシュアリティについて講義を受け、チームの中で検討を重ねた。

その結果、当事業で作成中の HIV/AIDS 予防に関するガイドブックと手話ビデオ、そしてイラスト(デザイン)に修正が加えられた。ビデオ教材には盲者にも分かるよう、副音声を付ける為に、手話通訳者がトレーニングを受けた。非識字層のろう者と知的障害者の間では「書き文字」や「話し言葉」に頼らないイラストで情報共有ができた。(写真参照)*マンガ冊子として印刷予定。

これまでもっばらろう者だけの世界で生きてきたプロジェクトチームが障害種別を越えた交流をすることで、社会における差別やアクセシビリティニーズの意識を高めることができた。チームの中に、ろう者だけでなくいかに「他の障害・ニーズ」を持った人にも情報を伝えられるだろうかという熱意も強まってきた。

地域のろうコミュニティのリーダーとして活躍しているチーム団体が他の障害者団体との交流を深め、地域の障害者運動において障害当事者が事業を担っていくことの重要性を更に強くアピールしていくことの大切さを再認識できた。

(3)得られた教訓など:

普段ろう者だけのグループではわからなかった他の障害当事者が持つアクセス・ニーズについて知ることが出来たことは、当事業のカウンターパートであるろう組織 FENEIS にとっても大きな発見になった。

肢体障害当事者・車椅子使用当事者の活動参加は、ろう者・盲者だけではあまり気にならなかった環境アクセスが大きな壁になっていることを改めて学んだ。会場に車椅子アクセシビリティが必要なことは勿論だが、会場までの経路・交通手段においてもアクセスが無ければ肢体障害当事者・車椅子使用者は会場まで来られない、という事を今後市街から離れた遠隔地域に行った時にも考慮する必要がある。(車椅子使用者が学校へ行く手段が無く教育が受けられなければ、「非識字」になってしまう。)

(4)今後の活動・フォローアップの方針:

今後も続けて地域の障害当事者に広く呼びかけ、これまで作成してきた教材の評価を継続し、障害種別に合った修正・調整を加えていく予定。

遠隔地域で行う HIV/AIDS 予防啓発ワークショップにおいても幅広く障害当事者の参加を求めて各地域で個々人の権利とニーズを尊重した啓発事業が行われるよう保健局にも働きかけていく。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

< センシティブティ・トレーニングを受けたたんぼぼメンバーの感想 >

パトリシア(ろう者・プロジェクトコーディネーター): 今まであまり他の障害者とふれあいが無かったが、今回のトレーニングを通して新しいコンタクトが生まれた。もっと他の障害当事者にもプロジェクトに参加して欲しい。

ミレリー(ろう者・HIV/AIDS ワーカー): 普段からろう者はコミュニケーション手法に苦労しているので、他の障害者ともジェスチャーなどを使ってコミュニケーションがとれたことが嬉しかった。

アリソン(ろう者・HIV/AIDS ワーカー): もっと盲者のコミュニケーション手法(点字など)について学びたい。なぜならそれを活かして「盲ろう者」ともコミュニケーションが取れるようになる必要があるから。

ホブソン(ろう者・ビデオ撮影・編集者): ビジュアル教材にこだわってビデオやイラスト・デザインによる教材を作ってきたが、盲者又は盲ろう者が必要とする教材についてももっと研究が必要だ。その為には直接会って、一緒に活動することが必要。

(2) 活動の写真

< 写真 >



マリアナさん(知的障害当事者)とアントニオ君(ろう者:たんぼぼチーム)
知的障害当事者が利用する音楽とダンスによるエクササイズを体験

<写真 >



プロジェクトメンバー(ろう者)が始めて点字を習った。

<写真 >



HIV/AIDS テストクリニックでの寸劇の撮影

<写真 >



チームの寸劇を基にしたイラストによる啓発(性感染症の症状が出たら病院へ行こう！)